14 世紀の「唐船」と京都の感染症

荒木 和憲

日本の中世（11〜16 世紀）は災害と戦乱の時代である。とくに中世後期（14〜16 世紀）は、地球規模の寒冷化にともなう天候不順と飢饉に幾度となく見舞われ、それに追い打ちをかけるように地震・津波、台風・洪水、感染症、そして戦乱があいついだ。いわゆる複合災害が中世を生きる人々を苛んだのである。そうした中世人の「日常」に思いをいたすにつけ、現今の「新型コロナウィルス感染症（COVID-19）」の世界的な感染拡大が少しでも早く終息し、複合災害へと展開しないことを祈るばかりである。

さて、私が専門としているのは、中世日本の対外交流史（東アジア交流史）である。これまで戦乱との関わりは多少考えてきたつもりだが、感染症の問題はどこか遠いものを感じていた。他の時代・地域を対象とした研究では、ありふれたテーマなのかもしれないが、少なくとも中世日本対外交流史の分野では特に議論されることがなかったからだ。ところが、COVID-19 の感染拡大が国境をこえた人の移動・交流の拡大と不可分であること、そして都市社会がいかに脆弱なものであるかを目の当たりにするなかで、決して対外交流史と災害史は無関係ではありえないという気づきを得ることになった。そこで、これまであまり気にとめていなかった、感染症に関するひとつの記録をもとに、その接点をさぐってみることにしたい。

その記録というのは、公家の洞院公賢（とういんきんかた）が書き残した、『園太暦（えんたいりゃく）』という名の日記である。1345 年（貞和元）9 月 12 日条に、

> 伝え聞くところによると、光厳上皇は咳病がひどくなっておられ、明日から始まる予定だった長講堂（ちょうこうどう）の供花会（くげえ）は延期になったとのこと。このところ人々は咳病（がいびょう）にかかっており、なかには命を落とす者もいるという。唐船（とうせん）が帰国したときに、このようなことが起こるのだと、世間の人々が言っているらしい。
> （伝聞、上皇御咳病興盛、明日長講堂供花始行延引云々、凡此間人々咳病、或有殞命之輩云々、是唐船帰朝之時有此事之由、世俗称之云々、）

とある。旧暦 9 月 12 日（グレゴリオ暦では 10 月 16 日）頃の京都の市中では、「咳病」の

感染が拡大していた。そして、光厳上皇までもが感染してしまい、長講堂の供花会（仏教行事）の開始日は延期された。ただし、供花会は 4 日後の 20 日に開始され、上皇も行幸しているので（『園太暦』）、わりあい軽症で済んだらしい。

さて、本題は感染症の流行が「唐船」の帰国とどう関係するのかである。ここでいう「唐船」というのは、寺社の造営費用を稼ぐという名目で、日本から元朝支配下の中国へ派遣された船のことである。これを「寺社造営料唐船」とよぶ。13 世紀後半のモンゴル襲来以後、日元貿易は中断と再開を繰り返しており、直近では 1333 年頃から中断していたが、1342 年に天龍寺船が派遣された。そして、翌 1343 年に天龍寺船の貿易が許可されたのを契機として、日元貿易は再び活発化することになった（榎本渉『東アジア海域と日中交流』）。

その天龍寺船が帰国したのは、1344 年のこととされる（村井章介『分裂する王権と社会』）。翌 1345 年の 6〜7 月頃には、元に長期留学をしていた禅僧が博多に帰着し、まもなく京都へと向かっている（『友山和尚伝』）。『園太暦』の記事に照らすならば、彼らは何らかの名目で往来した「唐船」に乗船して帰国したことになろう。だとすれば、「唐船」の帰国と京都での「咳病」の感染拡大は、タイミングとしては符合することになる。ただし、「唐船」の帰国が確認されない 1343 年にも、夏季（旧暦 4〜6 月）の京都で何らかの感染症が発生しているから（『醍醐寺文書』康永 2 年 6 月 7 日足利直義諷誦文）、その因果関係は慎重に見極めなければならない。感染症の発生源を「唐船」とみなすデマが広がっていた恐れもあるからだ。

とはいえ、「唐船」に感染症のリスクが付きまとっていたのは事実なのではないだろうか。「唐船」に利用された船の型式が中国式のジャンク船なのか、それとも 15 世紀の遣明船に利用されたような和船なのかははっきりとしないが、どちらにしても、100〜200 人ぐらいは優に乗せることができる大型船だった。ただし、大型船とはいっても、1323 年に高麗の新安沖で沈没した「唐船」（東福寺船）の規模にかんがみると、全長 30m程度の船である。現代の船舶のように客室や船員室が整然と区画されているわけでもない。上級乗員のための特等室（屋形）が甲板に設けられていた可能性はあるが、一般の乗員や船員は甲板上か船倉内で過ごさざるをえない。

とくに船倉内はほぼ密閉された空間であり、ここに大人数が密集して過ごしたことになる。しかも、慶元（寧波）から博多まで直航するには約 1 週間を要する。新安沈船からは将棋の盤と駒が発見されているので、彼らは色々なゲームに興じることで、船旅の辛さを紛らわせていたのだろう。ただ、ゲームといっても、中世人の行うそれはだいたい賭けごとである。対戦者だけでなく、観覧者を含めて白熱したのだろうか。それはともかく、密接なコミュニケーションが営まれていたことはたしかである。こうして「三密」（密閉・密集・密接）

の状態が長時間続くわけである。

このような船旅を共にするなかに、1 人でも現地で感染症に感染した者がいれば、たちまち船内で感染が拡大してしまう。なかには現地滞在中に感染して既に免疫を獲得した者もいたかもしれないが、それでも「クラスター」（感染者の集団）の発生は免れないだろう。港湾での防疫が存在しない時代のことである。彼らが博多に帰港してまもなく、それぞれの都市へと戻っていけば、たちまち市中感染が発生してしまう。「寺社造営料唐船」は京都などの大寺社の造営費用を稼ぐという名目をもっているので、京都やその近郊に在住する人々が少なからず乗船していた。京都での「咳病」の感染拡大は、「唐船」と無関係とは言い切れないのである。

江戸時代の公家である柳原紀光は、『続史愚抄』という史書を編纂するにあたり、『園太暦』を参照していて、1345 年の京都で流行した感染症が唐船の帰国によるものだという説を誤り（「訛言」）とみなしている。そうなのかもしれない。ただ、『続史愚抄』の完成は 1798 年のことである。「鎖国」の時代であるから、もちろん日本からの出国はできない。そして、長崎に来航する清・オランダの商人・船員たちは、それぞれ出島のオランダ商館とその近くの唐人屋敷に収容された。どちらも長崎の町からは隔離された空間である。「唐船」や「蘭船」が入港したからといって、京都で感染症が拡大するリスクはきわめて低い。柳原紀光にとって、『園太暦』に記録された「唐船」が中国発着の船ではなく、日本発着の「寺社造営料唐船」であるとは知るべくもなかっただろうし、それが感染症と関係するものだとは思いも寄らなかったのだろう。

外国人居留地が隔離されて設定されるのは、古代の鴻臚館もそうであるし、日本だけにかぎったことでもない。私の専門を外れるので慎重であるべきだが、居留地が隔離されることは、防疫の問題とも密接な関係があるのではないだろうか。逆にいえば、日本人も外国人も随意に出入国できた中世の日本では、外国から流入した感染症が各地に拡散するリスクが高かったのではないだろうか。

以上は「コロナ禍」のなかでめぐらせた愚考の一端である。世界で巻き起こっている差別や偏見といった問題にかんがみれば、中世人の「穢れ」や「鬼」の観念との関わりも重要な論点となるだろう。小稿はなかなか実証がともなう話にまで至らなかったわけだが、「感染症」という視点を取り入れることで、中世日本の対外交流のさまざまな側面が浮かび上がってくるに違いない。

■荒木 和憲（あらき・かずのり）ARAKI Kazunori
2006 年、九州大学大学院人文科学府博士後期課程修了。博士（文学）。九州国立博物館研究員、文化庁文部科学技官等を経て、2015 年より国立歴史民俗博物館准教授。専門は日本中世史・東アジア交流史（とくに日朝交流史）。単著に『中世対馬宗氏領国と朝鮮』（山川出版社、2007 年）、『対馬宗氏の中世史』（吉川弘文館、2017 年）、共編著に『古文書の様式と国際比較』（勉誠出版、2020 年）がある。